二人にとっての故郷

文人の武蔵野

与謝野鉄幹・晶子夫妻 ②

1873年（明治6年）、与謝野寛は京都の寺院に生まれます。その5年後、晶子は堺の和菓子屋に生まれます。寛は19歳で上京し、まもなく武蔵野を故郷とする歌を詠むようになります。その後、詩歌革新を志して東京新詩社を立ち上げ、機関誌「明星」を創刊。上田敏、石川啄木、北原白秋らを輩出し、一時代を築きます。晶子も寛に才能を見出された一人ですが、初対面からすぐに「罪の恋」を経て二人は夫婦となります。

1901年、家を捨てるように上京してきた晶子を迎えたときの感慨を寛は「武蔵野にとる手たよげの草月夜かくてもつよく京を出できや」と詠みます。同じとき、晶子は「人痩せて色なき髪のみだれ髪渋谷の秋を歌とひますな」と不安を隠さず歌にしています。二人の暮らしは、渋谷村、現在の道玄坂辺で始まります。妻に去られた国木田独歩が同じ渋谷村で「武蔵野」を書いた数年後のことでした。

鉄幹と晶子が結婚し、暮らし始めた地（渋谷区道玄坂で）

その後の二人は、渋谷から千駄ヶ谷、神田、麹町、井荻と転居を重ねます。特に井荻村の下荻窪に落ち着いてからの晶子は、「霧島にあれど子等あるむさし野の家を忘れず都を忘る」と詠むなど、はっきり「むさし野」を「家」（故郷）としています。

1904年、日露戦争に召集されていた弟の身の上を率直に案じて物議を醸した詩「君死にたまふこと勿れ」もまた武蔵野の地にあり夫の影響下で生まれた作品です。与謝野夫妻は、武蔵野でともに生き、愛し、書いた武蔵野の文人でした。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

おすすめの1冊

「君も雛罌粟 われも雛罌粟」

本書は、医学博士で小説家の渡辺淳一が「強い共感と密着感」を抱きながら「のりにのって書いた」与謝野鉄幹・晶子夫妻の伝記です。二人の作品と多くの先行研究を読み込んだ上で物語化していますので、一つの見方を提示し得ています。

（渡辺淳一著、文春文庫）

武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

■ あすの暦

3月17日（水曜日）
旧 2月5日＜赤口＞

通日 76
月齢 3.7
（正午）

＝東京標準＝

日出	5.49	満潮	6.45
日入	17.50		19.11
月出	7.52	干潮	0.51
月入	21.21		13.10
			（中潮）